

～「服部杯」の由来～

「服部杯」という名前は、平成12年3月3日、51歳の若さで、惜しくもこの世を去られた、服部英俊先生を記念してつけられた冠の名前です。

服部杯の優勝カップが、なぜあのように大きいかというと、体の大きかった服部先生にちなんで、先生のお父様から作っていただき寄贈されたものです。

この「服部英俊先生」ほど、バスケットボールを愛した人はいませんでした。まさに今の「石狩バスケット」の基盤を築かれた方なのです。

「堅守速攻」一今やすっかり定着している言葉ですが、「石狩バスケット」にその精神をしっかりと根付かせたのは、バスケットボールに情熱を注ぎ続けた服部先生なのだと言っても過言ではありません。

服部先生は、昭和47（1972）年、江別市立江別第一中学校に新任教師として赴任して以来、広島町立（現北広島市立）東部中学校、江別市立江別第二中学校、江別市立中央中学校の各校で、バスケットボール部の指導にそれはそれは熱く熱く携わり続けました。

その過程で、服部先生は、石狩を、さらには北海道を代表するバスケットの指導者として、全道大会にも何度も出場しました。石狩がまだ弱くて、全道大会に出場しても勝てない時代から、現在、石狩ジュニアバスケットボール連盟会長の高橋憲康先生とは、大学同期のライバル同士、親友同士として互いに切磋琢磨し、昭和55年には男子大麻中（高橋先生）、女子東部中（服部先生）でアベック準優勝を達成しました（その頃は優勝チームしか全国に行けませんでした）。その悔しさをバネにさらに切磋琢磨していく中で、石狩がだんだん強くなり、昭和63年に北広島緑陽中女子、平成元年に大麻中男子が準優勝をして全国出場を達成する中、その翌年の平成2年、江別第二中女子を率いて、服部先生にとって宿願ともいえる石狩初の全道優勝を果たし、徳島県徳島市で行われた全国大会への出場を果たしたのです。

服部先生は、それが自校チームであれ選抜チームであれ、自分もったチームに対しては、常に目標を高くもたせ、自分のもてる限りの情熱を注ぎました。「集合や整列はどのチームより素早く整然と」、「挨拶や試合（練習）中の声はどのチームよりも元気よく大きな声で」、「控え室やベンチはどのチームよりしっかり整理整頓を」、「どんなに苦しくつらい練習にも必死に立ち向かっていく努力の姿勢」、「どんな試合も最後の最後まで全力で戦い抜く姿勢」など、決して忘れてはいけない「石狩バスケット」の精神をゆるぎなくつくり上げていきました。まさに、我々後輩の指導者の見本となるように、常に全力で戦い、礼儀正しく、頑張る選手、チームを育てていったのです。

選手たちもその厳しい指導について行く中では、時に挫折しそうなほど悩んだり、苦しんだりするのですが、その情熱とか愛情の意味が心の底からわかって乗り越えられた時には、本当にバスケットボールが好きになり楽しくなったといえます。きっとその時、人間的にも一回りも二回りも成長したのではないのでしょうか。その時の頑張りや、大人になって社会生活を送る上で十分生かされていると実感している人も少なくないという話もよく聞きます。

服部先生という方は、バスケットボールを通して、まさに人生そのものを指導された方だと思います。バスケットに賭けるその情熱に、私たち後を引き継ぐ石狩のコーチ達は、心から服部先生を尊敬し、「石狩バスケット＝がんばりバスケット」を引き継ぐよう、互いに切磋琢磨し頑張り続けました。

そんな私たち石狩の仲間が熱い思いを結集させて、「絶対に服部先生の名前を石狩のバスケットに残そう！」と決意スタートさせたのが、この「服部杯」なのです。

「ただバスケット（技術）がうまくなり、ただ試合に勝てばよいのではない。」「常に目標を高くししっかりとめて厳しい練習に立ち向かい、目の前の試合に全力を尽くす。」「今自分がバスケットボールに打ち込めることを心から幸せなことだと思い、それを実現させてくれる周囲に心から感謝の気持ちをもつ。」など、バスケットボールに心から真剣に打ち込むことによって、ぜひ自分自身を成長させていってほしいと思います。その力をチームとして結集させてさらに強くなっていってほしいと思います。それこそが、きっと真に強い「石狩バスケット」の実現につながるはず。服部先生が育てた「石狩バスケット」を、ぜひ皆さんの力でさらに発展させていってくださることを強く願います。

